
『失われた時を求めて』再考

——長い回想の起点——

林 良児

Reconsideration on *A la recherche du temps perdu*

— The starting point of a long remembrance —

Ryoji HAYASHI

はじめに

『失われた時を求めて』冒頭の一句、「長いあいだ、私は早く床についた」につづく数頁、現行のプレイヤッド版にして六頁余りの導入部が過ぎて、物語が語り手の幼年時代に入ってゆくころ、読者であるわれわれはいつも妙な胸のつかえを感じる。そのような状態になると、そのさきを読んでゆくことがなかなか困難である。その数頁には語り手の過去の特異な習慣が描かれているのだが、要約すれば次のようになるだろう。

「長いあいだ」早く床につくことを常とした語り手は、夜中になるとよく目を覚ました。眠りから覚めた最初の瞬間、彼は自分がどこに寝ているのかを必死になって知ろうとする。彼の脳裏には過去に過したことがあるいくつかの部屋が浮かんで消える。この間、時間にすればわずか数秒のことにすぎない。それにつづく長い夢想のなかで、彼はたったいま去来したいくつかの部屋をひとつひとつ確認しつつ、ついに自分が間違はなく自分の部屋の自分のベッドに寝ていることに思いいたる。しかし、いまや過去の回想に弾みがついてしまっているため、大抵の場合はすぐに再び眠ろうとはせずに、自分自身に関りのある過去や、その過去にまつわる人たちのことを思い出しながら夜の大部分を過したというのである。

小説はこのあと、語り手がそのようにしていくたびとなく回想した過去の具体的な記述に向かう。その手始めが、コンブレーにおける語り手の幼年時代というわけである。こうしてみると、導入部から幼年時代への移行は一見スムーズであるように見える。

しかし、いましがた読み終えたばかりの導入部における語り手は、いったいいくつくらいの男なのだろうか。そのような疑問が湧いてくる。さきほど妙な胸のつかえと言ったのはそのことである。一見たわいもないようなこの疑問は、それに対する答えが取りも直さず『失われた時を求めて』の基本構図に関する解釈を意味するという点で重要である。なぜならば、この疑問は『失われた時を求めて』という長い回想の物語の起点を問うものにほかならないからである。いったい語り手の回想はどの時代から始まっているのだろうか。本稿の目的は、この「長いあいだ」という一時期が語り手の過去のどこに位置するのかを説明することにある。

I. 物語内部の時間

夜中に目を覚まし、それにつづく曖昧な数瞬とそのあとの長い夢想の時間を過ごす語り手がいくつくらいの男であるのかを推定するには、彼の生涯がどれくらいの歳月にわたるものなのかということが問題になる。しかし、『失われた時を求めて』のなかに、そのような推定の基礎となる何らかの秩序あるクロノロジー（年代学・年表）を読み取ることがはたして可能なのだろうか。二つの代表的な研究を踏まえながらまずその点を明確にしなければならない。

一つは、早くから『失われた時を求めて』における年代学の問題に取り組んできたウィリー・アシエの研究である。彼は、小説のなかで触れられている歴史上の諸事件に基づいておおまかな時代の枠を決定し、その枠のなかに語り手を初めとする登場人物のさまざまなエピソードを当てはめてゆく方法で物語の年表を作成

した。たしかに、小説のなかに流れる年月と歴史の年月とのあいだには一致しないものがある。しかし大枠においてはほぼ一致している、彼はそう主張した。『失われた時を求めて』が歴史の年表を軸にして展開している小説であると見たのである。

さて、ウィリー・アシエが一連の論文で指摘した『失われた時を求めて』の年表は二通りである。一つは、彼が「内的年表」あるいは「短い年表」と名づけているものである。それによると、語り手が生まれたのは一八八〇年、ゲルマント大公妃のマチネは一九一九年である。したがって小説の終章における語り手の年令は三十九歳ということになる。もう一つは、「外的年表」あるいは「長い年表」と名づけているものである。これは、彼がハンス・ロベルト・ヤウスの指摘を受けて、語り手の二度目のバルベック滞在以降の年数を見直して作成した年表である。そこではゲルマント大公妃のマチネが一九二七年に位置づけられている。「内的年表」よりも八年さきに延びるわけで、終章における語り手の年令は四十七歳という計算になる。しかし、アシエはそのような二通りの物語の年表が考えられることを認め、たうえて、ゲルマント大公妃のマチネの年は大抵の場合に読者の大多数が考えるであろうように一九一九年に位置づけるほうが自然であるとの判断を下した。彼が「内的年表」と名づけたものこそ『失われた時を求めて』における物語の年表であるとしたのである。そして、小説のなかに流れる歳月をその「内的年表」のようにまとめた場合に生じてくる問題、すなわち、歴史上の諸事件と作中人物の年令とのずれについては、その原因をとりわけ第一次世界大戦のあいだに行なわれたブルーストの大幅な加筆に求めたのである^②。

このようなアシエの解釈を否定する立場をとる代表的な研究家は、一九七九年に『失われた時を求めて』における年代学と時間⁽³⁾を出版したガレス・ステイールである。この大部の論文は、著者の論敵とも言えるアシエから『失われた時を求めて』に関する不朽の著作と評価されており、まさしくこの小説の年代学に関する「膨大な百科事典」と呼ぶにふさわしい労作である。彼の方法は、まず小説のなかの年号や年数だけをもとにして物語の年表を作成し、次に小説のなかで言及されている歴史上の諸事件の日付に焦点を合わせてもう一つの物語の年表を作成し、最後にそれらの結果を踏まえて、『失われた時を求めて』とは何かを解きあかそうというものである。前者を「内的年表」、後者を「外的年表」と名づけている。

ステイールのこの「内的年表」によると、語り手が生まれたのは一八七九年、ゲルマント大公妃のマチネは一九二三年ないし一九二四年である。したがって終章における語り手の年令は四十四歳ないし四十五歳ということになる。それに対して、「外的年表」によれば、ゲルマント大公妃のマチネは一九一九年であり、終章における語り手は四十歳の計算になる。このような緻密な考察をつうじて、彼は「内的年表」と「外的年表」との歳月があまりにも矛盾すること、また、「外的年表」のさまざまな項目それぞれ自体のあいだに多くのひずみがあることを指摘した。そして、無視し難いそれらの矛盾ゆえに、『失われた時を求めて』に一貫性ある年代学を認めることは不可能であるとの結論に達した。『失われた時を求めて』は、そのなかに正確な歴史の模倣を読みとることのできるような小説では決してなく、体験を得るべき一つの世界なのだ

という解釈を示したのである。

ところで、ガレス・ステイールは一貫した年表の存在を否定する一方で、一般の読者ならこう読むであろうという想定のもとに一つの総合的な年表を作成した。「一般的読者の年表」と名づけられたこの年表は、アシエの「内的年表」と同様、ゲルマント大公妃のソワレを一九九九年、ゲルマント大公妃のマチネを一九一九年に位置づけている。

このように、『失われた時を求めて』のなかの歳月を計算しながら物語の年表を作成する段階で浮かび上ってくる数多くの矛盾、それらをどう判断するかという点でアシエとステイールの見解は分かれたのである。では、われわれはアシエのように矛盾は矛盾として認めたうえで、小説における物語の年表は一貫していると考えるべきだろうか。それともステイールのように、矛盾は許容範囲をはるかに超えるものだととして、物語に一貫した年代学はないと考えるべきなのだろうか。

たしかに、小説のなかの年数や年代を拾ってゆくと辻褃の合わない点が多く出てくる。細かく検討すればするほどそうである。ロベルト・クルティウスが言ったように、魂の季節の交替によって行われる『失われた時を求めて』の時の計算は年代学的な分析を許さないのかもしれない。⁽⁴⁾しかし、すつきりとまとめることができるような形では存在しないものの、推定の妥当性が追認されている項目と年号があることは確かである。しかもそれらは物語を支えている重要な柱なのである。

その第一点は、物語の大団円であるゲルマント大公妃のマチネが、ブーランジェ事件からちょうど三十年後の一九一九年の出来

事として描かれているということである。第二点は、ゲルマント大公妃のソワレがマチネから遡ること二十年の一九九九年の出来事として描かれているということである。第三点は、アシエが彼の「内的年表」において、またステイルが彼の「内的年表」において示し、モーリス・バルデーシュもその研究のなかで明言していること、すなわちゲルマント大公妃のソワレに招かれたとき、語り手は二十歳ないし二十一歳であったということである^⑥。

ところで、バルデーシュやアンリ・ボネが各々の研究のなかで述べているように、年月を隔てた二つのサロンを描くことで時間の抗い難い力を表現しようという意図は、小説の初期の下書きのなかにすでに見られるのであるから、ゲルマント大公妃のマチネの場面が、執筆当初から実際の一九一九年の出来事として設定されていたということはあり得ない。この点ひとつを取ってみても分かるように、物語にとって重要なのは、一九一九年とか一八九九年という年号では決していない。重要なのは、小説の最終稿においてそうした時代区分を与えられるようになる長い時の経過そのもののなのだ。われわれが留意すべきはまさにその点である。

さて、いま述べたとおり、語り手がゲルマント大公妃のソワレに出席したのは二十歳くらいの時であるという読み方に関する限り、年代学の見解は一致している。見解に相違が出てくるのは、そのソワレから大団円のマチネまでのあいだにどれくらいの歳月が流れているのかという点である。大まかな時間の枠で理解すれば二十年間であった。しかし、ステイルが綿密な方法で作成したその「内的年表」のなかで明示したように、ソワレからマチネまでは、少なく見積っても二十三年間は経過していると

いう指摘も度外視するわけにはいかない。したがって、『失われた時を求めて』が歴史の枠組をほぼ忠実に守っているかどうかを別にすれば、現段階では、最終的に次の点を理解するに止めておくことが賢明であろう。すなわち、終章における語り手は、マチネ以降すでに三年の歳月を生きているという点^⑦を考慮に入れると、四十三年ないし四十六年の歳月を過去にもつ男であること、そして、語り手の出生以前の数年間をも描いているこの小説は、その物語を約五十年の時の流れのなかに展開させている小説であるということである。では、語り手が「早く床についた」というあの「長いあいだ」とは、そうした四十数年に及ぶ語り手の生涯のどこに位置するものなのだろうか。

II. 「長いあいだ」の時期と場所に関する諸見解

冒頭第一行の「長いあいだ」についてこれまでに言われてきたことを整理すると、内外の諸氏の見解は三通りに大別することができる。第一に、「長いあいだ」とは語り手がダンソンヴィルに滞在した日々を含む時期を指すという読み方である。第二に、「長いあいだ」とは語り手がサナトリウムで療養していた時期に当たるといふ読み方である。第三に、「長いあいだ」とはゲルマント大公妃のマチネ以降の時期であるという読み方である。

ところで、「長いあいだ」の期間をめぐる重要な鍵は、その間の不眠の夜に語り手が回想した内容である。ステイルが指摘したように、不眠の時期にダンソンヴィルで過ごした日々が回想されている以上、「長いあいだ」の起点は、少なくともダンソンヴィル滞在が終了してからのことであると考えられる。その終点について

はどうか。語り手が「長いあいだ」の不眠の夜に、マドレーヌ体験から得た多くの日々を回想しているのは「コンブレ」第二章の末尾に描かれているとおりである。ところで、この体験がなぜ彼に幸福感を味わわせてくれたのか、その理由は当時の彼にとつて謎であったという。しかし、ゲルマント大公妃のマチネの日になると、語り手にはマドレーヌ体験を初めとする無意志的記憶の回想の意義がついに啓示され、それとともに、この日までの振り子のごとき彼の過去に終止符が打たれるのである。つまり、マドレーヌ体験の意義の重大さを理解できないでいた日々を含む不安定な過去の一時期にすぎない「長いあいだ」は、すべての謎が解かれたあのゲルマント大公妃のマチネの日以降にずれ込むことはあり得ないのである。したがって、「長いあいだ」の終点は、少なくともゲルマント大公妃のマチネの日以前でなければなるまい。では、「長いあいだ」をダンソンヴィル滞在の終了以降、ゲルマント大公妃のマチネの日以前の「一時期と解釈することに問題は無いのだろうか。

物語の展開のなかで、語り手のダンソンヴィル滞在与マチネのあいだを埋めているものは、ただ一つサナトリウムでの療養の日々である。「長いあいだ」を、ダンソンヴィル滞在終了以降、ゲルマント大公妃のマチネ以前と見なす見解は、まさにこの点に問題があるのである。以下に述べるように、「長いあいだ」の重要な要素であるマドレーヌ体験の一日と、基本的要件である早寝の習慣とが宙に浮いてしまうからである。

マドレーヌ体験は、「ある冬の日」に起った。場所は、外から帰った語り手を温かく迎えてくれる母や家政婦のいる家である。

語り手のパリの自宅と見て間違いはないだろう。つまり、「長いあいだ」というその期間は、語り手がパリの自宅で過した冬の日々を含むものでなければならぬということなのである。このような条件を満たす時期が、はたして語り手のサナトリウム滞在の期間内にあり得たであろうか。

タンソンヴィル滞在の直後に始まった二つのサナトリウムでの療養は、「長い歳月」にわたる。この間、語り手がパリに戻ったのは一九一四年八月からの二ヵ月と一九一六年の「一時期である⁹⁾。サナトリウムで過した長い歳月が具体的にどれくらいなのかといえば、これは、語り手が新たなサナトリウムから戻った年、つまり、ゲルマント大公妃のマチネの年をいつに推定するかで異ってくる。その年を一九一九年と見なすアシエの「内的年表」によれば二十二歳から三十九歳までの約十七年間であり、その年を一九二三年ないし一九二四年と計算したステイルの「内的年表」によれば二十五歳から四十四歳ないし四十五歳までの約二十年間である。

このように長期にわたるサナトリウムでの療養の日々と、語り手がパリの自宅で過した冬の日々とが隣接しているのはただ一度きりである。たしかに、サナトリウムとパリとの二つの生活がたがいに隣接する時期は三度あるわけである。しかし、語り手が社交界と袂を分かち旅行も美術館も断念して最初のサナトリウムに入ったのは、タンソンヴィルで「暑い季節」を過した直後のことであつたし、一九一四年のパリ滞在は八月からの二ヵ月であつた。結局、「長いあいだ」の第一条件、すなわち、それがタンソンヴィル滞在の終了以降、ゲルマント大公妃のマチネの日以前の「一時期

であることと、第二の条件、すなわち、その時期には語り手がマドレーヌ体験をした冬の日のパリの生活が含まねばならないこと、この二つの条件にかなう時期は、語り手が一九一六年の初めにパリに戻り、暑気の残る日々を経て新たなサナトリウムに発つていった時期ただ一つである。しかし、この時期の語り手の生活のリズムはどうであったか。彼は、たとえば燈火管制が敷かれる夜九時半を過ぎてから友人たちに会いに行ったものだという¹²。だとすれば、少なくともこのパリ滞在中には、「長いあいだ」の基本的要素というべきあの早寝の習慣はなかったと言わねばなるまい。かくして、「長いあいだ」は語り手がサナトリウムで療養していた一時期を指すという見解もまた否定せざるを得ない。

「長いあいだ」に関するさまざまな見解についてその妥当性を考えてみたが、その際に判断の基準としたものは、第一に、「長いあいだ」のおおまかな起点と終点であった。それらは、『スワン家のほうへ』を読むかぎり、そう理解せざるを得ないものであった。ところが、一般的な解釈として多くの研究家に支持されてきた「長いあいだ」の最大限の起点、すなわち、「長いあいだ」は少なくともダンソンヴィル滞在の終了以降にあるという解釈を否定し得るだけの意味をもつ一節が実は存在するのである。この点を指摘したのは、ステイルであるが、その一節とは、『囚われの女』の末尾近くにあり、語り手のマドレーヌ体験に関するものである。物語の舞台となっているのは、語り手がアルベルチヌと同棲しているパリの自宅であり、ヴァントウイユの未発表作品が演奏されたヴェルデュラン家の夜会からいく日も経っていないあの夜の出来事である。

その夜も、語り手はアルベルチヌの同性愛の問題について考えることに疲れはて、そうしたときの常として、彼女にヴァントウイユの音楽を弾いてはくれまいかと言う。彼女の奏でる美しい一楽節は、語り手がかつてマルタンヴィルの鐘楼や、バルベックの道で何本かの木を目にしたときの悦びとか、マドレーヌを浸した一匙の紅茶を口に含んだときに感じた悦びと同じように彼をうっとりさせるのである。

何物もヴァントウイユの美しい一楽節以上に、私がこれまでの人生でときどき感じたあの特殊な悦び、たとえばマルタンヴィルの鐘楼や、バルベックの道で何本かの木を前にしたときの悦び、あるいはもっと単純に、この作品の冒頭で一杯のお茶を飲んだときに感じた悦び、こういった悦びに似かよったものはなかったのである¹⁴。

この一節は何を意味しているか。動詞の時制からも明らかのように、このときすでに語り手はマドレーヌ体験を済ませていたということである。したがって、マドレーヌ体験の日の前後におよぶあの「長いあいだ」の起点は、少なくともアルベルチヌとの同棲の時代にさかのぼる筈なのである。年令でいえば、二十一、二歳のころである。アルベルチヌとの同棲の時代はゲルマント大公妃のソワレから一、二年後の出来事であり、彼がダンソンヴィルに滞在するよりも前であることは言うまでもない。これは、「長いあいだ」の起点をダンソンヴィル滞在の終了以降と読む一般的な解釈に反するものであろう。

このように、「長いあいだ」の最大限の起点は、いまやダンソンヴィル滞在の終了以降と終了以前との二通りに位置づけることが可能になったわけだが、じつは、ステイルが指摘した起点よりもさらに前に起点を位置づけることができるのである。その根拠となるのは『ゲルマントのほう』二部第二章に見られる一節である。

物語の舞台はゲルマント公爵夫妻が催す晩餐会である。夫人に對する語り手のあこがれもいつの間にか消えている。上流社交界に不慣れな彼は、自分が場違いな存在であることを感じて憂うつになりながらも、すぐれたフランス語で語られる貴族的な会話に新鮮な驚きを覚える。それは決して、その昔山査子を前にしたときやマドレーヌを味わったときに感じたような深い印象から発散した精神の高揚ではなかった。しかし、それまでの彼にはまったく無縁だったものであり、自分自身の内部から生まれたものと外部から生まれたものとの違いはあっても、精神の高揚に違いはない、そう語り手は考える。

私がゲルマント夫人のところできいた話は、昔私が山査子を前にしたときとかマドレーヌを味わったときとかに感知したものととはたしかにちがっていて、それまでの私には縁がなかったものなのであった。⁽¹⁵⁾

マドレーヌ体験がこのような形で回想されているということは、体験の日をその一日としてもつ「長いあいだ」の起点が、少なくともこのゲルマント公爵夫妻の夜会よりも前に位置するというこ

とである。この夜会はドンシエール滞在以降、ゲルマント大公妃のソワレ以前の出来事であるから、語り手の年令で言えば十八か十九のときである。では、「長いあいだ」の起点を、ステイルが指摘したようにアルベルチーヌの失踪以前に位置づけた場合や、われわれが指摘したようにゲルマント大公妃のソワレ以前に位置づけた場合、それらの期間に「長いあいだ」の種々の要件を満たすような日々があり得るであろうか。物語の年表から言って、考察の対象となり得る期間は、ゲルマント大公妃のソワレを含む時代からタンソンヴィル滞在までである。まず、語り手がタンソンヴィルに滞在していた日々はどうだろうか。

語り手がサン・ルー夫人の館のあるタンソンヴィルに行ったのは、ヴェネチア旅行から数カ月後のことである。このタンソンヴィル滞在は彼にとって重要な意味をもった。ジルベルトとの散歩の折に、彼女の言葉を通じて次々と意外な発見をしたからである。少年時代の彼にとって未踏の地であったゲルマントのほうにメゼクリーズのほうと通じているということ、ヴィヴォーヌ川の水源は理想郷であるところかたんなる洗濯場らしきものにすぎないことを知らされる。コンブレーの時代に築き上げたあらゆる観念がことごとく崩れてしまったのである。このとき語り手はアシエの「内的年表」に拠れば二十二歳（一九〇二年）、ステイルの「内的年表」によれば二十五歳（一九〇四年）であった。

しかし、「長いあいだ」がそのようなタンソンヴィル滞を含む日々を指すという見方にはやはり無理がある。なるほど、館に滞在した数日、語り手は導入部に描かれているのと同じように、寝る前にろうそくを消すこともし、夜中にふと目を覚ましたことも

ある。しかし、彼は毎晩、多くはジルベルトとともに、晚餐の二時間ほど前になってから散歩に出たという。その晚餐とは、「かつてのコンブレーなら、みんながとくに眠っているようなおそい時間」にとられたのである。要するに、暗くなってから出かける散歩、十時前後のおそい時間の晚餐、そうしたものの延長線上に來る就寝の時刻が「早く床についた」という形で回想される筈はないのである。したがって、タンソンヴィル滞在をはさむ時期にも「長いあいだ」の基本的要件を満たす日々はないのだ。

次に、タンソンヴィル滞在よりも前の時代はどうだろう。たしかに、この時代には「長いあいだ」の日々を思わせるような日々があることは事実である。もともとも良い例は、ステイールが指摘した最大限の起点とまさに符合するもので、語り手がアルベルチーヌと同棲していた時代である。同棲の期間は秋から翌年の春ごろまでであるから、「長いあいだ」は冬の日々を含むものでなければならぬという条件をも満たしている。この当時語り手はすでに健康を害していたが、そうしたなかでとくに不眠の夜が頻繁にあったことが示唆されている。たとえば次のような箇所である。

「外の物音うるさくない？」と彼女はたずねた。「あたしは大好きなんだけど、あなたはそれでなくたって眠りがとても浅いんだから。」私は反対にくぐすり眠ることがあった。(…)
とくに朝になってやっと寝ついたときの眠りは深かった。⁽¹⁹⁾

朝になってようやく眠りに入ったという語り手の癖は、小説の冒頭に描かれたあの不眠の夜の習慣を思わせる。また、深い眠り

から覚めたあとの「わずかな数分のあいだに私は数時間を生きた」とか、「夢の世界は覚醒の世界と異なっている」⁽²⁰⁾という表現など、冒頭の不眠の夜とその折の語り手の意識の流れを連想させるものが少なくない。こればかりではない。時代はアルベルチーヌ失踪のあとになるが、この当時の語り手の夜はなんと冒頭の不眠の夜に似ていることだろう。たとえば次のような一節である。

或るときは、夢を見ずに目が覚めてみると心のなかで風向きが変わっているのに気がついた。過去の底から方向のちがう冷たい風が絶え間なく吹いてきて、普段は聞こえない遠い時の鐘や、発車の汽笛を運んできた。私は本を手にとろうとするのだった。⁽²¹⁾

しかし、このようなアルベルチーヌとの同棲の日々も、「長いあいだ」の出来事の一つを考えると否定せざるを得ない。また、それ以上に、彼女の失踪後の日々が、「長いあいだ」に結びつくような印象をどれほど与えてくれようとも、「長いあいだ」の基本的条件の一つ、すなわち、その最大限の起点はタンソンヴィル滞在中の終了以降に位置する筈であるということとの矛盾を説明することはできず、やはりその妥当性を主張することは不可能である。

かくして、理論上、その最大限の終点をゲルマント大公妃のマチネの前日とする「長いあいだ」の起点はますます謎めいてくるのである。しかし、プルーストがほかでもない長い回想の初めに「長いあいだ」という語を用いた以上、少なくとも彼の心のなかには、この言葉によって意味しようとした一期間の明確なイメージ

はあった筈である。それにしても、「長いあいだ」に関してこれほど多様な解釈が生じるのはいったいなぜなのか。それは、「失われた時を求めて」固有の性格を勘案せずに「長いあいだ」を推定しようとする点にあると言わなければならない。つまり、加筆の問題を考慮せず、執筆年度の異なる各篇を同一線上に並べ、そこから関連のある事項をぬき出して取り合わせ、そして「長いあいだ」の時期を限定しようとする方法それ自体に無理があるのである。では、無理のない有効な方法とはなにか。それは、「長いあいだ」を『スワン家のほうへ』のなかにおいてのみ理解することである。構想の変化から生まれた後続の各篇が「長いあいだ」にどのような変容をおよぼすことになろうとも、少なくとも『スワン家のほうへ』が出版された一九一三年の時点においては、この第一篇の冒頭第一句として確かな意味を託されていたに違いないからなのである。

Ⅲ. 一つの仮説

さて、『スワン家のほうへ』に範囲を限定して「長いあいだ」の日々を推定しようとする際、考慮しなければならない点が一つある。すなわち、一九〇九年のカイエと、一九一〇年から一九一一年にかけて書き上げられたとされるカイエの存在である。⁽²³⁾これらのカイエは『失われた時を求めて』の最終章に当たるものである。ブルーストは、ポール・スデーに宛てた一九一九年十二月十八日付の手紙のなかで、「最終巻の最終章を書いたのは第一巻第一章の直後でした。中間の部分はすべてその後で書きました。」と述べているが、この二つの章は、バルデーシュが言ったように、

長い回想のなかにあつてまさに「固定して動かない二つの航路標識」⁽²⁴⁾だったのである。このようにゲルマント大公妃のマチネを描いたカイエを考慮しながら、推定のための範囲を『スワン家のほうへ』に限定すると、「長いあいだ」について確実に言えることは次のとおりである。まず、「長いあいだ」の時間的な大枠であるが、これは、小説全篇から推定されたものと同様、語り手がタンソンヴィル滞在を終了した日をその最大限の起点とし、ゲルマント大公妃のマチネの前日をその最大限の終点とするということになる。なぜならば、一九〇九年の下書きの段階から語り手の回想はマチネの日をもつて終ることになっており、この日を超えるエピソードは存在しないからである。次に、ダンソンヴィル滞在の終了した日からマチネの日までにどれくらいの時が流れているのかであるが、これも小説全篇から算出された十七年から二十年くらいまでの歳月と同じくらいの長さで初めから小説の構想のなかにあつたことが分かる。というのも、物語の主要な柱であるゲルマント大公妃のソワレとマチネのあいだを埋める年数が、最終稿における二十年間と符号するかのように、一九〇九年の段階から一五年以上、二十三年未満の幅になっているからである。⁽²⁵⁾その他、マドレーヌ体験の日が「長いあいだ」の一日であるということも無論確かである。しかし「長いあいだ」を彷彿とさせるような要素は見当らない。あくまでも謎なのだろうか。ここで私は最後に残る問題、すなわち、語り手の現在について考えてみたいと思う。回想されている時期がその時間的な大枠以外に何一つ明らかでないいま、その時期を推定する唯一の方法は、それを語り手の語り

語り手の現在の問題は、「長いあいだ」と同様多くの解釈が成り立つ難問である。しかし、『スワン家のほうへ』だけに限定すれば、それはただ一つである。さて、語り手の現在を端的に示しているのは、第三部「土地の名」の末尾に出てくる「今年」という言葉である。⁽²⁶⁾このときに語り手が目にした風俗の描写からみて、この年が二十世紀初頭のベル・エポックに区分されるものであることに疑いはない。いずれにせよ、『スワン家のほうへ』が出版された一九一三年を超えることはあり得ない。⁽²⁷⁾

また、小説が語り手の回想の形式をとっている以上、その語り手の現在は、物語を構成しているすべての出来事よりも時間的にはあとに位置するものでなければならぬ。したがって、アシエやステイルがすでに指摘しているように、「長いあいだ、私は早く床についた」と語り始めたとき、語り手は、回想の不可欠な要素として確定していたあのゲルマント大公妃のマチネをすでに生きていたのである。

ところで、ゲルマント大公妃のマチネ以降の時点に立つて長い回想に着手した語り手は、すでにかなりの年令に達している。このことは、風俗の変化を嘆き、青春時代をふりかえりながら、「私はもうあまり年をとってしまったのかもしれない」⁽²⁸⁾と洩らした語り手の感想のなかによく表われている。小説全篇から編み出された物語の年表によれば、ゲルマント大公妃のマチネの年、語り手は四十歳に手が届いたところであった。語り手の現在はそれ以降であるから、結局、回想に着手した語り手の年恰好は、四十代前半の病弱な、そして「とざされた部屋」にいて落葉へのノスタルジーを⁽²⁹⁾つのらせるほど繊細な感受性をそなえた男ということになる。

さて、このような語り手の語りの現在と「長いあいだ」の関連のなかで重要な位置を占めているのはあのマドレーヌ体験の日である。まずわれわれは、その体験が語り手の現在からみて「ずっと最近になって」⁽³⁰⁾起きた出来事であったとされている点に注目しなければならない。この一節を読むかぎり、「長いあいだ」にはマドレーヌ体験の日という、語り手の現在に非常に近接した過去が含まれているように考えられる。この点と、語り手の現在が物語の最後のエピソードよりもあと、すなわち、彼の生涯の終り近くにあるという点とを重ね合わせると、「長いあいだ」が語り手の生涯のかなり晩年に位置する筈であるという見解はそのとおりであるように思われてくる。

しかし、そのように言い切ることが不可能であることにわれわれは気づく。というのも語り手は、このマドレーヌ体験がもたらした無意志的記憶の回想について、それがなぜ幸福感を味わわせてくれたのかを知るのは「ずいぶんのちのこと」⁽³¹⁾であると言っているからである。その理由を知る「ずいぶんのち」の日がゲルマント大公妃のマチネの日であることはすでに述べたとおりである。要するに、語り手の語りの現在と「長いあいだ」の一日であるマドレーヌ体験の日とが、一方においてはかなり近接した関係にありながら、他方においては、「ずいぶんのちのこと」と表現されるに足る歳月をへだてて位置しているということである。したがって、語り手の現在から見るとき、「長いあいだ」と言われている時期は、近くて遠い過去であると言わざるを得ないのである。ところで、『スワン家のほうへ』から引きだすことのできた「長いあいだ」の大枠は、ダンソンヴィル滞在の終了以降、ゲルマン

ト大公妃のマチネ以前であった。物語の歳月の枠も初めからほぼ確定していたのであるから、語り手の年令で言えば二十代の前半から四十歳ころまでの期間である。いったい、そのような期間のどのあたりに、あの近くて遠い「長いあいだ」の日々は位置するのだろうか。

たしかに、一つの可能性としては、「長いあいだ」が老いを意識した壮年の日々から若年の日々までの幅広い範囲を指していると言えなくもない。プルーストにおける「長いあいだ」の用法から言って、冒頭第一行の「長いあいだ」がタンソンヴィル滞在終了以降、ゲルマント大公妃のマチネまでの十五年から二十年ほどの歳月のほぼすべての期間を指しているとしても不思議ではないのである。しかし、十五年以上の長きにわたって、早寝の習慣がつづき、「ときどき」とは言え夜中に目を覚まし、幼年時代から二十代前半までの自分の過去とその周辺を回想したというのはあまりにも不自然であろう。冒頭の「長いあいだ」とはやはり、十五年以上の歳月の中の一定の期間、敢えて言えば、一・二年、二・三年あるいは三・四年、そのような時の幅を意味するものと思われる。では、語り手の現在から近くて遠い、そのような「長いあいだ」の日々を位置づけるための決め手はないのだろうか。私はここに、それらの日々を示唆していると思われる一節を指摘したいと思う。それはほかならぬ『スワン家のほうへ』の導入部にある一節である。語り手は、不眠の夜の出来事の一つとして次のような情景を回想している。

ときには睡眠の途中で、あたかもアダム肋骨からイヴが生

まれたように、一人の女が私の腿の寝ちがえの位置から生まれてきた。その女は私自身が味わおうとしている快感から形成されたものであるのに、その女が快感を提供してくれると私は想像するのであった。私の肉体はその女の肉体のなかに私自身の体温を感じ、その女の肉体と一つになろうとし、そこで私は目がさめるのだった。³²

「私の肉体はその女の肉体のなかに私自身の体温を感じ、その女の肉体と一つになろうとし、そこで私は目がさめる」というこの一節はどのような情況に則したものでろうか。これは、睡眠状態にある男子が体験する、性的な夢をとまった特異な生理現象、すなわち、夢精を述べたものにほかなるまい。しかもこの語り手は、そうした無意志的欲望に「ときおり」見舞われていたのであり、当時の彼はまだ十分にその若さを維持していたと見るべきであろう。語り手のこのようなイメージは、その生涯の晩年にあつて、すでに壮年の域に達した病弱な語り手のイメージからはあまりにもかけ離れている。したがって、「長いあいだ」というその言葉は、語り手の晩年というよりも、むしろ、タンソンヴィル滞在を終えた二十代前半の日々に近い時期を指しているように思われる。

この一節だけではない。もし「長いあいだ」が語り手の晩年に近い時期であるとすれば、不眠の夜に時代を追って過去を回想している語り手は、なせもつと語り手の現在に近い彼の晩年を回想してはいないのか。「長いあいだ」が語り手の生涯の晩年に近いとすれば、彼はすでに四十年近い歳月を生きてきたはずなのに、不

眠の夜に思い出したことが、コンブレーや、バルベックや、パリや、ドンシエールや、ヴェネチアや、そしてタンソンヴィルなど、いわば二十代前半までの過去の日々に限られているのはなぜなのか。たしかに「他の場所での生活」も思い出したと語り手は言っている。しかし、二十代前半までの過去を象徴する土地をすべて列挙しながら、それ以降の時代を暗示するものが欠落しているのはなぜなのか。これらの疑問点もまた、「長いあいだ」を若年の語り手のほうに導くことだろう。

『スワン家のほうへ』の筆が進むにつれて、あるいはまた、小説全体の構想の手直しのために、当初「長いあいだ」に与えられたであろう言葉の背景はそれ自体大きく変っていったに違いない。しかし、『スワン家のほうへ』の冒頭で「長いあいだ」という過去に思いを馳せた語り手の念頭にあったものは、創造をめぐってゆれ動いていた彼自身のそうした不安な青年の姿ではなかったのだろうか。

結論

一九八二年九月の『ポエティック』五十一号は、クロード・ヌ・ケマールが一九七八年の「ブルースト情報紀要」八号に発表した『失われた時を求めて』冒頭部の起源⁽³⁴⁾と題する八種類のカイエを掲載した。ケマールはそれらのカイエを忠実に転記しながら、初めは物語風エッセーを導くために書かれた数行がしだいにその役割を変えて来るべき『失われた時を求めて』の出発点になっていったその過程を跡づけている。

たとえば、一九〇九年二月頃の「カイエ」では「夜十時にベッ

ドに入り、何度かの短い目覚めがあつて、翌日の朝まで眠った時代」と書かれていたことが確認できる。冒頭句のその八種類のカイエはアルマス・グ्रेसイオンの論文を通じてさらに詳しく見ることができるとりわけ「カイエ五」には、「二十歳ころまで、私は何度か短い目覚めはあつても夜はずっと眠っていた」と明記されている。これらの下書きなかで語られている主人公の早寝の習慣が、一九一三年に出版された『失われた時を求めて』の冒頭に描かれているあの「長いあいだ」の習慣の前身であることは明らかであろう。下書きカイエのなかに見られる「早寝の時代の私」が二十歳ころまでの青年であつたというこの一点は、まさに、『失われた時を求めて』における「長いあいだ」の語り手がまだその若さを維持していたというわれわれの仮説を裏づけてくれるものと言えるだろう。逆に、これらの下書きのなかにも、小説における「長いあいだ」の語り手がその生涯の晩年にあるという見解の傍証となりうるものはない。⁽³⁶⁾

本稿の目的は冒頭第一行の「長いあいだ」の謎解きをしながら『失われた時を求めて』の基本構図を明らかにすることであつた。なるほど、この小説については「円環の構造」⁽³⁷⁾が指摘されて久しい。しかし、この定義は、『失われた時を求めて』の密なる一貫性を抽象的に捉えているにすぎない。導入部の不眠の夜を過している語り手はいったい幾つくらいの男なのか。最終章の語り手は幾つくらいの男なのか。私の言う基本構図とはそのような作品の見取図である。

長い回想の起点は二十代半ばを中心にした時代に近い。「長いあいだ」の正確な年数は不明だが、そのころの不眠の夜の出来事

を語る形で語り手はまず幼年時代に立ち戻り、そこから四十代の現在に至るまでを回想している。『失われた時を求めて』の基本構図とはそのようなものであらうと筆者は考えている。

注

- (1) *-La chronologie et l'âge des personnages d'A la recherche du temps perdu (Bulletin de la Société des amis de Marcel Proust et des amis de Combray) (= BMP, no. 6, 1956*
-Retrouves à une chronologie, BMP, No. 11, 1961
-Fiches biographiques de personnages de Proust, BMP, No. 15, 1965
- (2) Willy Hachez, *BMP*, no.11, p.397.
- (3) Gareth H. Steel, *Chronology and Time in A la recherche du temps perdu*, 1979, Droz.
- (4) エルンスト・ロベルト・クルティウス、円子修平訳「マルセル・プルースト」『世界批評大系5、筑摩書房、1974、p.139.
- (5) マチネの日、「二十年前」のパーティーが大いに問題にされる。なお、Gérard Genette はゲルマント大公妃のソワレを一九八八年に位置づけよう。(Cf., *Figures III*, Seuil, 1972, p.84.)
- (6) モーリス・バルデーシユ、井上究一郎訳「小説家マルセル・プルースト」筑摩世界文学大系59 B、1982、p.260.
- (7) *Le Temps retrouvé*, Pléiade III, p.952.
- (8) W. Hachez と G. Steel 以外では、Hans Robert Jauss が語り手の生涯を四十二歳から四十七歳までのあいだと計算している (Cf. *BMP*, no. 8, 1958, p.498).
- (9) 一九一六年のバリ帰還については、その滞在の期間を断定し難い。短期間であるように読めるのだが、滞在中の出来事の背景の描写からは数ヵ月間に及ぶものと考えざるを得ない。また、次の一節「それに私は長くパリに留まらず、すぐにサナトリウムに戻ったのだ。」(*Le Temps retrouvé*, Pléiade III, p.751) から、新たなサナトリウム行きとは別に、一九一六年に一度、もとのサナトリウムに戻ったとも読める。いずれにせよ、語り手が一九一六年の初めにパリに帰ったことと、一九一六年の

秋ころ再び別のサナトリウムに出発したことは確かであらう。ところが、ステイールは「内的年表」のなかで、新たなサナトリウム行きを一九一八年に位置づけている。そこで筆者は、それを一九一六年の秋ころと推定した根拠を述べておく。語り手は一九一六年、二度目にパリに帰った。(じつはこの「二度目のバリ帰還」(III, p.755)の「二度目」の意味にも問題がある。というのも、これは一九一四年八月に初めてパリに戻ったときのその「最初の」(III, p.723)と呼応しているものと思うが、「すぐにサナトリウムに戻った」ことを考えると、一九一六年内にありえたかもしれない二度のバリ帰還のうちの二度目のものと読めないこともないからである)。その翌日、ジルベルトから新たな手紙を受け取る。そこには、「私がタンソンヴィルにまいりましてから、まもなく二年にならうとしています」と書いてある。この手紙を見て語り手は、彼女が一九一四年九月(III, p.751)の手紙とはずいぶんちがうことを言ってきたと思う。要するに、ジルベルトから新たな手紙を受け取ったのは、一九一四年九月から二年弱を経た一九一六年九月ころということになる。以下、細かな説明は省略するが、その新たな手紙を受け取った数日後に語り手はソドムの館でシャルリュス氏を見かけ、それから数日間(III, p.842)パリで過ごし、さらにサン・ルーの死を知って出発をさきに延ばしてから、ついに新たなサナトリウムに出発したのである。

- (10) *Le Temps retrouvé*, Pléiade III, *Ibid.* p.691.
- (11) *Ibid.* p.809.
- (12) *Ibid.* p.735.
- (13) G. Steel, *op.cit.* p.58.
- (14) *La Prisonnière*, Pléiade II, p.374. なお、ステイールはIII, p.381の一節のほうを挙げている。
- (15) *Le Côté de Guermantes*, Pléiade II, p.551.
- (16) *Le Temps retrouvé*, Pléiade III, p.691.
- (17) *Du côté de chez Swann*, Pléiade I, p.6.
- (17) Cf. G. Steel, *op.cit.* p.55.
- (19) *La Prisonnière*, Pléiade III, p.121.
- (20) *Ibid.* pp.121-122.
- (21) *La Fugitive*, Pléiade III, pp.540-541.
- (22) 性的な夢の話 (Cf. 本稿注 no.33)

- (23) Cf. H. Bonnet, *Matinée chez la Princesse de Guermantes*, Introduction, なお二二目のカイエ57について M. Bardèche は一九二二年のカイエと言っている。
- (24) 「小説家マルセル・ブルースト」p. 250.
- (25) H. Bonnet, op.cit. p. 36.
- (26) *Du côté de chez Swann*, *Pléiade* I, p. 421.
- (27) スティールは、この場面の語り手の現在を一九一三年と推定した。Genette (Cf. *Figures III*, p. 107) を批判して次のように述べている: 「『スワン家のほうへ』が一九一三年十一月八日に出版されている以上、語り手の現在とは物語が書かれていた実際の時代に相当するとみなせば、それは遅くとも一九二二年十一月でしかありえない。」(Cf. op. cit. p. 172).
- (28) *Du côté de chez Swann*, *Pléiade* I, p. 425.
- (29) *Ibid.* p. 422.
- (30) *Ibid.* p. 186.
- (31) *Ibid.* p. 47.
- (32) *Pléiade* I, p. 210; *Pléiade* I, p. 239; *Pléiade* III, p. 1044 などにおける「longtemps」は相当長い年月を意味している。
- (33) *Pléiade* I, p. 4.
- (34) Claudine Quénar, *Genèse de l'incipit de la Recherche in Bulletin d'informations proustiennes*, 1978, no. 8.
- (35) Almuth Grésillon, *Encore du Temps Perdu, Déjà le texte de La Recherche in Langages*, no. 69, 1983, Larousse, p. 114.
- (36) たしかに、「失われた時を求めて」における「長いあいだ」が下書きカイエにおける「二十歳ごろまでの早寝の時代」をそっくりそのまま受けているものとは言えないかもしれない。一九一三年の小説によれば、「長いあいだ」はタンソンヴィル滞在以降にその起点をもつものでなければならぬし、この当時の語り手は二十代半ば近くに達していた筈だからである。しかし、下書きカイエにおける早寝の時代と私と、小説における早寝の時代の語り手がともに若い青年を彷彿させることに違いはない。なお、下書きカイエが語る「マチネのころ」の病気の私は『失われた時を求めて』のなかに描かれているような、死を意識し始めた晩年の病弱な語り手と軌を一にするものであり、この「マチネのころ」に近接していたいわゆる「早寝の時代」の私、すなわち小説における「長

いあいだ」の語り手は、それゆえ、その人生の晩年にあるのだという推論に対しては、病状の悪化という事態が語り手の生涯の晩年と少しも直結するものではないことを指摘しておきたい。なぜならば、『見出された時』で語られているように、病状が悪化したためにサナトリウムに入った語り手は、二十歳ごろの出来事として位置づけられているゲルマント大公妃のソワレから三、四年後のあのタンソンヴィル滞在の直後の日々、すなわち二十代の前半を生きていた男だからである。

- (37) 「円環の構造」についてはたとえば Jean Rousset の定義がある。 Cf. *Notes sur la structure d'A la recherche du temps perdu*, pp. 99-105, in *Les critiques de notre temps et Proust*, Garnier, 1971.

* 本稿に引用した『失われた時を求めて』の訳文は、多くの場合、井上究一郎氏（『スワン家のほうへ』筑摩世界文学大系57）、鈴木道彦氏（『囚われの女』中央公論世界の文学32）、保刈瑞穂氏『逃げ去る女』講談社世界文学全集75）の翻訳をほぼそのままの形で使わせていただいた。